世界の歴史教科書を読み比べてみた

東大カルペ・ディエム

ロシアの歴史教育は
ウクライナ侵攻でどう変わった?

韓国は過去の日韓関係
をどう捉えている?

「本当の歴史」はどこにある?

イギリスは帝国主義の「負の遺産」
とどう向き合っている?

ドイツとフランスはなぜ
「共同教科書」を作った?

世界の歴史教科書を読み比べてみた

東大カルペ・ディエム

星海社

383

SEIKAISHA SHINSHO

はじめに

みなさんは歴史の教科書にどんなイメージを持っていますか？

中学生や高校生のときに使っていた教科書にはどんなことが書かれていて、どんな印象があったでしょうか？

同じ「歴史の教科書」と言っても、世界を見渡すとその姿は驚くほどバラバラです。

何より面白いのは、そもそも〝どこから歴史を始めるのか〟が国ごとに違うことです。

日本の学校で歴史を学んだ人なら、「クロマニョン人」「四大文明」「メソポタミア」――そんな言葉から始まる世界史に馴染（なじ）みがあるでしょう。ところが、他国の教科書を開くと、必ずしも「人類史のはじまり」や「文明の誕生」から丁寧（ていねい）に積み上げていくとは限りません。むしろ多くの国では、早い段階から〝自分たちの歴史〟へと焦点（しょうてん）が寄っていきます。国によっては、この教科書で自国の歴史を学ぶことにどのような意義があるのか、しっかりと書いている場合もあります。

そもそも、「歴史のスタート地点」の取り方からして、実は議論の余地があるのです。

例えば植民地支配の歴史をもつ国では、「いま存在している国家の歴史」を語る前に、植民地化以前の歴史や、その土地にいた人々がどんな暮らしをしていたのかから書き出す必要が生まれます。歴史はどの年からでも書き始められるように見えますが、実際には「何を起点にするか」を決めた瞬間に、その国の価値観や政治性が立ち上がってしまいます。教科書とは、その意味で、最初の一行からすでに「選択」の産物なのです。

もう一つ、教科書比較がより深くなる視点があります。それが、その国が自分たちの歴史の「加害性」「被害性」をどう扱うかです。同じ事実に基づいていても、どちらの側面を強調するかによって、ある一国が加害者側になったり、あるいは被害者側になったりするという二面性があります。

この点で象徴的なのが、原爆投下をめぐる記述です。日本の教科書（や少なくとも多くの日本人の学習経験）では、原爆投下について「正しかった」「仕方なかった」と断定的に価値判断するよりも、被害の実態や証言を知ることに重きが置かれます。言い換えれば、「何が起きたのか」を具体的に理解させる教育です。

ところが、原爆を投下したアメリカの教科書の記述は、しばしば別の景色を見せます。

研究者による比較分析では、アメリカの歴史教科書の多くが、原爆投下を「本土侵攻を回避し、米兵の命を救うために必要だった」という文脈で説明していることが報告されています。ある研究では、調査対象の大半がこの論理を採用していたとされます。[*1]

また、アメリカの高校教科書は「原爆投下の決定」そのものをめぐる論争を十分に扱えていない、という教育現場側からの批判もあります。[*2]

もちろん、アメリカの教科書にも多様性はありますし、近年は授業用教材として「賛否を比較しながら検討する」設計の学習資料も提供されています（アメリカ国立公文書記録管理局「原子爆弾投下の決定」ハリー・S・トルーマン大統領図書館・博物館）。[*3]

しかし、近年の世論調査では、若い世代を中心に「原爆投下は正当化できない」「日本に謝罪すべきだ」という意見が増えていて、２０１５年の調査では44％が「正当化されない」「無回答」と回答しています（ピュー研究所の調査による）。また、２０２５年の最新調査で

＊1　Crawford, K. (2003). *Re-Visiting Hiroshima: The Role of US and Japanese History Textbooks in the Construction of National Memory. Asia Pacific Education Review, 4 (1)*, 108–117.

＊2　Maley III, L. & Mohan, U. (1997). *Americas Hiroshima: Culture Wars and the Classroom. Education About Asia, 2 (2)*. Association for Asian Studies.

＊3　https://www.trumanlibrary.gov/education/presidential-inquiries/decision-drop-atomic-bomb

は60％以上が同様の立場を示しているという結果も出ています。この変化の背景には、歴史教育の現場で従来の「正当化」一辺倒の授業ではなく、複数の視点を提示し、批判的思考を促す授業が増えていることがあります。

他の国に目を向けてみましょう。ドイツの教科書はナチスによるホロコーストと第二次世界大戦の加害責任を明確に記述し、「過去の克服（Vergangenheitsbewältigung）」を歴史教育の中心に据えています。一方、第８章で紹介するようにオーストリアは長年「ヒトラーの最初の犠牲者」という「被害者神話」を維持してきましたが、１９８０年代以降、自らのナチス協力の歴史と向き合い、加害責任を認識する方向へと転換しました。また、韓国の教科書は、日本による植民地支配の被害を強調し、慰安婦問題や強制労働を詳述しますが、ベトナム戦争における韓国軍の加害行為についてはほとんど触れられていません。

この本の目的は、「この国の教科書は正しい、あるいは間違っている」と断じることではありません。そうではなく、それぞれの歴史教科書を率直に読み比べて、歴史教育について考察を深めることです。

その国は歴史をどこから始めるのか

どの出来事を厚く書き、どれを薄く書くのか

加害と被害を、どんな言葉遣いで、どんな距離感で語るのか

歴史記述にどんな教育目的があるのか（市民性・愛国心・批判的思考・アイデンティティの形成など）

これらをできるだけ客観的に拾い上げ、日本の歴史教科書の感覚と照らし合わせながら、「歴史教育の難しさが、いちばん露骨に表れる場所」としての教科書を読み解いていきたいと思います。

教科書は、国家の〝公式見解〟であると同時に、社会が次世代に渡したい「世界の見方」でもあります。

だからこそ、国ごとの教科書を比べると、歴史そのもの以上に、その国が〝いま何を大事にして生きているか〟が見えてくるのです。本書は、その見え方の違いを楽しみながら、同時に私たち自身の歴史教育を問い直す材料として提示していきます。

目次

はじめに 3

第1章 イギリスの歴史教科書 帝国主義の「負の歴史」との向き合い方 11

第2章 ロシアの歴史教科書 ウクライナ侵攻以降、強まる愛国主義 25

第3章 フランスとドイツの共同歴史教科書 かつての敵同士が紡ぐ共通の歴史 35

コラム 加害者と被害者が共存するスイスの歴史教育 53

第4章 ブラジルの歴史教科書 植民地としての歴史をいかに語り直すか 57

第5章 韓国の歴史教科書 隣国との「しこり」をどう教えるか 71
第6章 チベットと中国の歴史教科書 主権を失ったチベットの歴史をめぐる伝承と抹消 91
第7章 デンマークの歴史教科書 教科書のない国の歴史教育 111
コラム 国によって変わるナポレオンの評価 127
第8章 オーストリアの歴史教科書 「被害者神話」から「加害責任」への転換を学ぶ 133
第9章 バルカン半島諸国の歴史教科書 民族紛争が続く地域での和解への試み 139
おわりに 日本の歴史教科書を見直してみる 159

第1章

イギリスの歴史教科書

帝国主義の「負の歴史」との向き合い方

『イギリスの歴史【帝国の衝撃】　イギリス中学校歴史教科書』
ジェイミー・バイロン、マイケル・ライリー、クリストファー・カルピン著、
前川一郎訳、明石書店、2012 年

「世界史を学ぶと、イギリスのことが嫌いになる」――ＳＮＳなどで時折囁かれるこの言説は、世界史を学んだ多くの人が一度は耳にしたことがあるかもしれません。大英帝国として世界中に植民地を築き、産業革命を成功させて「世界の工場」として君臨したイギリス。その繁栄の影には、植民地での搾取、暴力的な統治、そして現代にまで続く紛争の火種を残した外交政策がありました。

では、当のイギリスでは、自国の歴史をどのように教えているのでしょうか。植民地支配の負の側面について正面から向き合っているのか、それともある程度「見ないふり」をしているのか。今回は、中学生向けの歴史教科書を通じて、イギリスが自国の取ってきた政策についてどのように教えているのかを見ていきます。

もちろん、1冊の教科書だけから国家全体の教育方針を知ることはできません。しかし、この教科書からは、イギリスの歴史教育における興味深い特徴が浮かび上がってきます。それは、「一定の反省を示しながらも、物語的な構成によって問題を個人化する」という手法です。さらに注目すべきは、教科書自体が完璧な答えを提示するのではなく、生徒たちに「考えさせる素材」を提供する姿勢です。

この章では、19世紀の大英帝国が行ったインド統治、アフリカでの植民地政策、そして

現代のパレスチナ問題にまで影響を与えた「三枚舌外交」という三つのテーマを中心に、イギリスの教科書がどのように自国の「負の歴史」と向き合っているのかを分析します。

イギリスにおける歴史教科書の位置づけ：数多くある教材の中の一応の主役

その前に、イギリスの学校における歴史教科書の位置づけや使い方を軽く見ておきましょう。

イギリスには日本のような教科書検定制度がなく、学習指導要領に相当するナショナル・カリキュラムの拘束力も低いです。日本では教科書が授業の絶対的基盤となりますが、イギリスでは「数多くある教材の中で一応の主役的存在」程度の位置づけです。今回参照した教科書も、イギリス全土で使われているものの、実際に授業で使うかどうかはそれぞれの先生に委ねられています。

その背景には、歴史は答えが一つに定まった物語ではなく、複数の視点や解釈が存在しうるという考え方があります。教師には大きな裁量が与えられ、教科書のほかに一次史料、新聞、映像など多様な資料を組み合わせて授業を構成します。そのため、教科書の記載内容と実際に教えられる内容が一致しないことも珍しくないようです。

負の歴史への丁寧な反省：インドでのきびしい塩税

この教科書でまず強調しておくべきは、イギリスの政策が植民地等にもたらした負の影響について、一定程度丁寧な反省を示しているという点です。日本の世界史教科書では触れられないような具体的な事例を用いて、イギリスの暴力的統治の実態を描いています。

19世紀のイギリスは、産業革命の成功によってオランダやフランスを抑えて世界のトップに立ち、「世界の工場」として君臨しました。同時に、世界中の多くの地域を植民地として取り込み、原料供給地かつ自国製品の市場としたのです。

インドは綿花等の供給地であり、同時にイギリス産綿織物の市場でもありました。この教科書が特に注目しているのが、イギリス東インド会社による「塩税（えんぜい）」です。生活必需品（ひつじゅ）である塩に対して、イギリスの統治者は、かつてインドの王国が課したよりもはるかに高い税金を課しました。さらに、税金を回避するための塩の密売を厳しく取り締まったのです。

教科書はこう記述しています――「インド人は、イギリス人が単に貿易のパートナーであればきっとありえなかったかたちで、イギリス人の支配者に対して次第に不快感を覚えるようになりました」（71ページ）。ここには、経済的搾取が単なる「ビジネス」を超えて、被

支配者の尊厳を傷つけるものであったという認識が示されています。

インド大反乱への残虐な報復

こうした厳しい統治に耐えかねた人々によって、１８５７年にインド大反乱（セポイの反乱）が発生しました。この反乱に対するイギリス軍の対応について、教科書は驚くほど率直に記述しています。

「実際には、イギリス軍は正義の追及の程度を超えたところまで足を踏み入れていました。かれらは報復を望んでいました」

具体的には、次のような残虐行為が記されています。

反乱者を大砲の口に縛り付けて粉々に吹き飛ばす

絞首刑になる前のヒンドゥー教徒・イスラム教徒に、宗教上禁忌（きんき）である牛や豚の肉を食べさせる

これらは単なる軍事的鎮圧ではなく、文化的・宗教的侮辱（ぶじょく）を伴う「報復」でした。日本

の教科書では「インド大反乱が鎮圧された」という一文で済まされることが多い出来事について、イギリスの教科書は自国の残虐性を隠さず記述しているのです。

ベニン王国での欺瞞的な条約締結

アフリカのベニン王国（現在のナイジェリアの一部）に対するイギリスの対応も、この教科書は批判的に描いています。

イギリス人将校のガルウェイ大尉が現地の王（オバ）と条約を締結した際の様子について、教科書はこう記述しています。

> 条約は英語で書かれていて、数人のアフリカ人翻訳者が条約の文言を翻訳してオバに伝えようと試みました。オバは、イギリスと貿易する一般的な合意をガルウェイ大尉と交わしただけだと思いこんでいました。ところが、実際の条約の文言は、ベナン〔ベニン〕の支配権を事実上イギリスに譲り渡すというものでした。（82ページ）

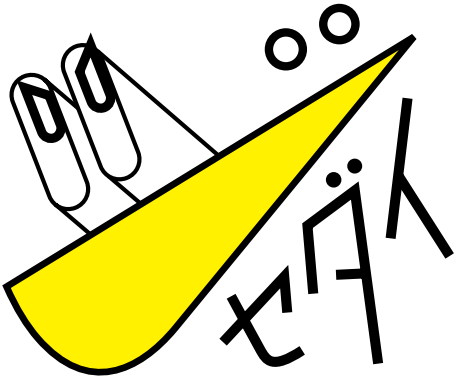
これは明らかに、相手が正確に理解できない形で不平等条約を結ばせたという欺瞞（ぎまん）です。

しかも、その後イギリスによって引き起こされた虐殺事件で王宮が破壊されたことについても、教科書は次のように記しています。

> イギリス人は……ついに王宮を確保し、オバ自身を捕縛しました。数日のうちに王宮は焼け落ちました。イギリス人は、王宮が焼け落ちたことは事故であったと主張しましたが、真実はだれにもわかりません。（84ページ）

この「真実はだれにもわかりません」という表現は、イギリス側の「事故だった」という主張に対する明確な疑義を示しています。

こうして見ると、この教科書は、イギリスが手を染めてきた暴力的な手段について、相当程度丁寧に伝えようとしていることがわかります。単に「植民地支配があった」という事実を述べるだけでなく、その具体的な残虐性、欺瞞性、そして被支配者の視点を示そうとしているのです。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!